どんぐり

No.75

内　容

○巻頭言「令和の時代の自然学校」
○自然学校の充実に向けて
○令和元年度自然学校実施報告書のまとめから
○南但馬自然学校調査・研究委員会から
○特色ある取組「主体性を育み、達成感や自己有用感を高めるために」
○健康で安全な自然学校の実施に向けて
○令和２年度講座・研修会のご案内

「隠れ家づくり」(加西市立北条東・富田小学校)

兵庫県立
南但馬自然学校
HYOGO KENRITSU MINAMI TAJIMA SHIZEN GAKKO
Nature Education Center

令和の時代の自然学校

兵庫県立南但馬自然学校
副校長　藤原　良光

自分の体ほどの大きなバッグにリュックサックと水筒を持ち、帽子をかぶって元気よく階段を上がり、本校自慢の大屋根広場に集まっていく子ども達。事前の出前講座で出会った子ども達なら、私を見つけて、「あー」とか「こんにちは」と声をかけてくれます。ほとんどの子ども達と同様、私も緊張とともにどこかしらウキウキした気持ちになります。

開校式では、校歌を歌ったり、児童代表が誓いの言葉を述べたり、各校で工夫を凝らした進行になっています。そして、本校の服部校長の挨拶の中で「タデ(蓼)」という植物を味わいます。その辛さに先生もビックリ。この体験によって「蓼食う虫も好き好き」という諺を学習します。このようにして、本校での4泊5日の自然学校が始まります。

本県の自然学校推進事業は、昭和63年度に始まり、平成を経て、令和の時代へと入りました。本事業は、兵庫型「体験教育」の大きな柱の一つであり、「豊かな自然の中で、人とのふれあい、地域社会への理解を深めるなど、様々な活動に取り組むことを通して、心身ともに調和のとれた児童の育成を図る」ことを目的としています。以来、子ども達は、本校で自然の神秘性や恐ろしさ、人と協力して試行錯誤しながらやり遂げることの素晴らしさなど、多くのことを学んできました。今では、本県の自然学校を経験した保護者の子どもが本校で自然学校を経験することも当たり前となりつつあります。

本校の『平成29・30年度研究紀要』に面白いデータがあります。それによれば、保護者の半数近く（48・6％）が自然学校を経験しており、そのうち56・4％の保護者が、自身を振り返ってみて、自然学校が自らの人生に何らかの影響を及ぼしていると回答しています。具体的には、「自立心や判断力が養われた」「家族への感謝の気持ちが生まれた」「友達と協力することや思いやりの大切さに気づいた」「自然への興味を高めるきっかけとなった」などです。

利用校の先生方は、子ども達の実情を踏まえて、その学校独自のプログラムをつくり、5日間の活動を展開します。本校の指導主事は、そのプログラムづくりに助言を与え、裏方となって活動を支えます。自然学校前には、指導主事が学校に赴き、当日子ども達がうまくいくように、火おこしやロープワークなどを教えています。昨年度、県教育委員会は『自然学校活動プログラム指導資料』をつくり、各市町組合教育委員会や各小学校等に配布しています。これをしっかり実践することで、さらに充実した令和の時代の自然学校が展開できると確信しています。本校の指導主事も学校の支援に万全を期すよう日々努力しています。

このような本県の取組を他府県の先生方に紹介すると、その期間の長さに驚かれます。しかし、前述の『研究紀要』によれば、74・7％の保護者が4泊5日以上を望ましい自然学校の期間と答えています。2泊や3泊では得られないものがそこにはあるということです。

子どもにとって長丁場である4泊5日を終え、子ども達は、見送りの職員に元気いっぱい手を振って帰って行きます。その顔を見れば、少し成長したように思えます。そして、来年度もまた、子ども達の成長に一役買いたいと思っています。

自然学校の充実に向けて

兵庫県立南但馬自然学校
主任指導主事兼指導課長
仲本　修二

兵庫県で自然学校が開始され、30年が経過しました。

本校では、平成29年・30年に本校を利用した学校の児童・保護者を対象に「自然学校体験が参加児童に与えた影響について」というテーマで、調査・研究を行いました。その結果、82・4％の児童が「もう一度自然学校のような体験をしたい」94・7％の児童が「自然の中での活動を今後もしてみたい」と回答しています。また、「子どもに自然学校を体験させてよかった」と回答した保護者が97・2％おり、「子どもにもう一度自然学校のような体験をさせたい」と95・3％が回答したことからも、自然学校実施後の達成感や成就感に満ちた子どもの姿に喜びを感じ今後も継続的に実施することが期待されています。

しかしながら、子ども達を取り巻く社会の情勢は大きく変わってきています。SNSなど間接的な人とのつながりや、進化した人工知能が生活の中に入ってくるなど、人と人との温かな繋がりが薄れてきています。そのような現代の児童が抱える課題に対応できる自然学校の在り方が求められ、県教育委員会では、平成31年3月に『自然学校活動プログラム指導資料』を作成しました。

そこでは、30年目を迎えた自然学校の質的向上の柱として「児童の主体性」と「感動体験」をあげています。「児童の主体性」とは、自ら活動を選択したり、自ら課題を見つけたりする中で、課題の解決に向け、自分で考えやり抜こうとする態度であり、「感動体験」とは、人や自然や文化など、「本物」に出会うことで新たな自分を発見したり自分が役に立つ存在であることを認識したりすることです。

そのため、学校現場では、自然学校において「児童の主体性」と「感動体験」のあるプログラムの作成のために、これまでの自然学校を見なおし、工夫・改善していくことが求められます。「目標」「内容」「方法」「評価」が一体的につながりを持つように進めていただきたいと考えます。

(1)「目標」
児童の実態を踏まえ、理想とする児童の姿に向け、各学校でねらいを設定する。

(2)「内容」
ねらいを効果的に達成できるアクティビティや活動順を計画的に組み合わせ、プログラムを作成する。

(3)「指導方法」
児童が主体的に活動し、感動体験のあるアクティビティにするための進め方について計画を立てる。

(4)「評価」
活動内容を振り返り、自然学校終了後の学校生活や、次年度の自然学校の改善につなげる。

児童が主体的に活動し、感動体験のある自然学校にするためには指導方法を工夫する必要があります。指導者中心に進めるのではなく、児童が自ら主体的に活動したり、自然などに触れることにより感動的な体験を味わったりすることができる機会を意図的に組み込むことが求められます。

教育者である東井義雄先生の言葉に「させられる仕事からする仕事に変わるとき　苦しみは喜びに変わり　生きがいに目を輝かせる」とあります。豊かな人間性や問題解決の能力の育成につながり、これからの自分創りに意欲的に取り組める子どもの育成に、自然学校が大きな役割を果たすことができればと考えます。

令和元年度自然学校実施報告書のまとめから

「自然学校の一層の充実を図るための『６つの方策』」について

令和元年度、46グループ（67校）の利用校から提出いただいた自然学校実施報告書を集計したところ、「自然学校の一層の充実を図るための『６つの方策』」（自然学校評価検証委員会：平成20年３月）の達成状況は以下のとおりとなりました。

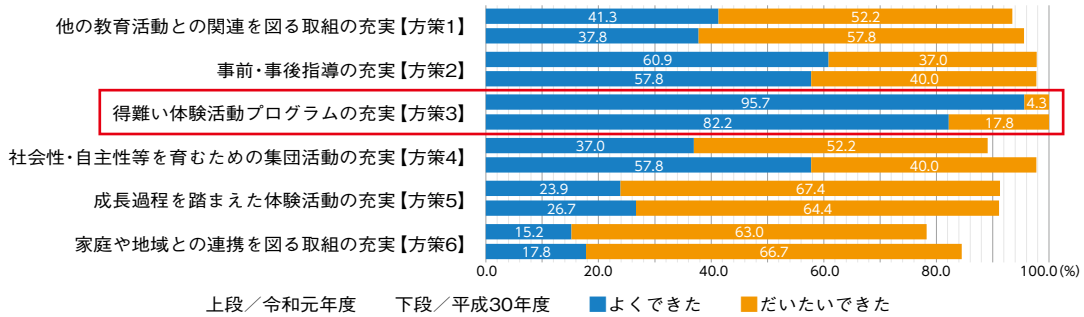

図１　令和元年度「自然学校の一層の充実を図るための６つの方策」の達成状況

「よくできた」「だいたいできた」の合計をみると、すべての方策で高い達成状況を示しており、方策１～３については90％を超えています。特に方策３については、本年度、昨年度のいずれも100％となっており、本年度は「よくできた」が昨年度に比べ13.5ポイント高くなっています。利用校の先生方の「学校では得がたい、南但馬自然学校だからこそできる体験活動を子どもたちにさせたい」という思いが一層強く反映されていることがうかがえます。

事後指導の一層の充実を

2019年度（令和元年度）の県教育委員会の『指導の重点』では、体験活動での学びをその後の生活や学習にいかすために「事後指導の充実」を求めています。このことについて、自然学校実施報告書では「学校の授業等で、事前事後活動はどのように行われたか」として質問しています。そのうち事後指導の指導時間数をまとめたものが次の図２、３です。

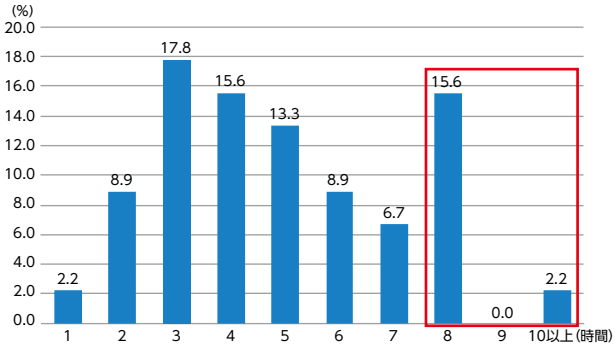

図２　事後指導時間数（平成30年度）

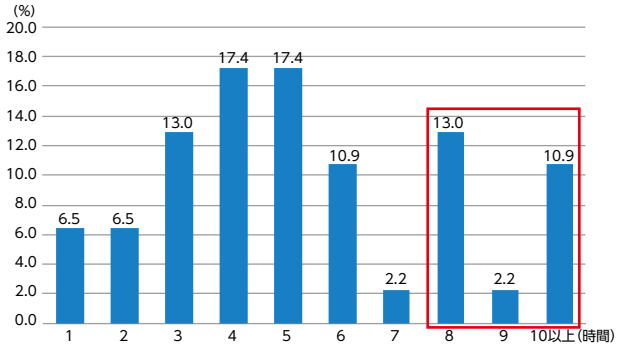

図３　事後指導時間数（令和元年度）

利用校の事後指導の平均時間数は、昨年度が5.3時間、本年度は5.4時間と差はわずかです。しかし、８時間以上の指導時間を設定した利用校は昨年度は17.8％だったのに対し、本年度は26.1％となり、8.3ポイント高くなっています。つまり、本年度の方が事後指導により多くの時間を設定した学校の割合が高く、10時間以上の設定をした学校も５校（10.9％）ありました。

事後指導の一層の充実のためには、他の教育活動との関連を図ることが不可欠です。80％以上の利用校では「総合的な学習の時間」で実施されていますが、中には「図画工作科」や「道徳科」での実施もあります。各学校においてはより柔軟な発想で、各教科等での事後指導の可能性を検討していただき、自然学校での貴重な直接体験と各教科等の学びが相乗的に作用することを期待します。

（森本　裕紀）

南但馬自然学校調査・研究委員会から

本校では、令和元・２年度の２年間にわたり、「五感を使った自然にふれる体験活動が参加児童に及ぼす影響について～児童及び教員の事後調査からの検討～」をテーマに研究を進めています。

(1) 調査目的　本校ならではの環境をいかした五感を使った自然にふれる体験活動（以下、自然体験活動と略）を実施した利用校の児童及び教員に対して事後調査を行い、参加児童にどのような効果や影響を及ぼすかについて検証する。

(2) 調査時期　令和元年度　第２学期（９月中旬～12月上旬）

(3) 調査対象　自然体験活動を実施した利用校の児童及び教員

表　事後調査を実施した児童及び教員数

		児童		教員	
		学校数	人数	学校数	人数
もみじがり		6	562	4	12
どんぐりコレクション		4	336	3	9
香りをきく		3	199	3	8
その他	紙すき体験	2	35	2	4
	鉛筆づくり	1	12	1	2

図１　児童Ａの「どんぐりコレクション」のワークシート

(4) 調査方法

児童　各自然体験活動のワークシートに活動した感想等を記入する。（図１は児童Ａの「どんぐりコレクション」のワークシート）
→感想中の各自然体験活動の目的に関するキーワードを教員向けアンケートの質問項目に照らし合わせて分類し調査した。

教員　「自然体験活動実施後アンケート」の質問項目に回答する。
→自然体験活動の学習効果や期待される資質・能力を図２のように設定し、その到達度を調査した。

《学習効果の項目に即したカテゴリー》
①自然への興味や関心が高まった【学びに向かう力】
②身近な環境の自然を調べようとする意欲が高まった【学びに向かう力】
③自然の多様性について考えることができた【思考力・判断力・表現力等】
④自然に関する知識を増やしたり、自然を調べるための技能を身に付けたりすることができた【知識・技能】

《選択肢》１ 効果あり　２ やや効果あり　３ どちらでもない　４ あまり効果なし　５ 効果なし

図２　学習効果の項目に即したカテゴリーと選択肢

(5) 結果

児童　「自然への興味や関心が高まった」ことに関する記述は、77.5％（1,144人中887人）であり、「自然の多様性について考えることができた」ことに関する記述は、53.1％（1,144人中607人）であった。

教員　「効果あり」「やや効果あり」の回答は以下のとおりであった。
①【学びに向かう力】91.4％
②【学びに向かう力】88.2％
③【思考力・判断力・表現力等】60.0％
④【知識・技能】85.7％

今後の方向性としては、利用校に自然体験活動を推奨し、参加児童に及ぼす効果や影響を継続的に検証するとともに、各教科等との関連性等について調査し、提示していく予定です。

また、本校ならではの自然資源や自然環境をさらに活用した新たな「五感を使った自然にふれる体験活動」を開発、紹介していきますので、各学校の自然学校プログラムの中に取り入れられていくことを願っています。　（水野　是清）

特色ある取組

主体性を育み、達成感や自己有用感を高めるために
～探検！発見！南但馬調査隊（姫路市立豊富小学校の取組）～

はじめに

姫路市立豊富小学校（５年生：88人）は、「自分から進んで疑問を見つけ解決できる人になってほしい」「自然や人の素晴らしさを感じられる人になってほしい」という担任等の願いから、「協力」「チャレンジ」「感動」をテーマにして自然学校を実施しました。そして、そのテーマのもと、児童の興味や関心に応じて設定した課題について、体験を通して解決していく「探検！発見！南但馬調査隊」をプログラムの中心に据えました。ここでは、児童の主体性を育み、達成感や自己有用感を高める取組として、その概要を紹介します。

「探検！発見！南但馬調査隊」の取組

自然学校実施前

＜課題設定・活動内容の検討＞

児童は、姫路市教育委員会が作成した調べ学習ガイドブックを活用しながら、自分達の興味のあることや知りたいことなどから課題を考えました。そして、以下のようなグループを編成し、個人で調べたりグループで相談したりしながら、‘南但馬だからできる’調査内容を整理して絞り込み、自然学校実施期間中に行う活動を自分達で考えました。

自然について	歴史について	産業について
昆虫探検隊	神社のヒミツをあばくぞ	お米調査隊
木のことについて知り隊	竹田城下町調査隊	コウノトリのまい（米）
自然観察隊	竹田城跡探索チーム	めざせネギ博士チーム
自然だ～い好きグループ		

自然学校実施期間中

＜調査活動＞

自然学校３日目にグループ毎に設定した課題の解決に向けた調査活動を行いました。

例えば、但馬各地で取り組まれているコウノトリを育む農法や朝来市の特産である岩津ネギについて調べるグループは生産農家を訪問し、生産者から生産工程や特色、やりがいや苦労などを聞き取るなど、地域の方との交流を深めながら活動しました。

＜振り返り（まとめの発表会）＞

自然学校最終日には、グループ毎に新聞形式や紙芝居形式などにして調査活動をまとめ、ワールドカフェ方式によって発表し交流しました。発表当日には調査活動に協力していただいた地域の方も南但馬自然学校に来ていただき児童の発表を見守っておられました。

児童の感想（一部抜粋）

- 竹田城跡を調べるとき、インタビューしたおばあさんの話を聞いて、今の問題は私達が未来に解決していきたいと思ったし、私達が住んでいる町も私達が守っていきたいと思いました。
- 南但馬調査隊をして、私達は調べる力や話を聞く力が付いたと思います。この力が付いたのはいろいろなことを教えていただいた方々のおかげだと思います。
- 南但馬調査隊が成功しました。この活動で自分が変化したところは、人のために何かができるようになったり、自分の町がどう変わって、変わっていくには何が大切なのかなどを考えられたりできるようになったことです。

おわりに

平成31年３月に県教育委員会が発行した『自然学校活動プログラム指導資料』では、「児童の主体性」と「感動体験」を自然学校の質的向上の柱としています。「探検！発見！南但馬調査隊」のように、児童の「知りたい」「調べてみたい」等を自らの課題とし、その課題解決の方法を考えることで、受け身ではなく主体的に活動に関わり、学ぶことの楽しさや達成感を実感することができます。また、活動の過程の中で、友達や地域の方々などの様々な人や自然等、「本物」に出会い関わることで、学校では得難い感動が生まれたり自己有用感が高まったりしていきます。

（井上　貴至）

健康で安全な自然学校の実施に向けて
～令和元年度南但馬自然学校傷病記録から見えてくること～

1　傷病記録から

(1) 傷病発生状況及び医療機関受診状況

今年度の傷病発生率は、平成30年度と比較して、内科、外科ともに減少しています。また、過去25年間の平均発生率と比べても、傷病発生率は、低い結果となっています。医療機関への受診については、内科での受診率は大きく減少し、外科においても減少しています。過去25年間の平均発生率と比べると、内科、外科ともに低い結果となっています。

表　傷病発生状況及び医療機関受診状況

	傷病			受診		
	内科	外科	合計	内科	外科	合計
R元年度傷病発生件数（件）	96	34	130	6	10	16
H30年度傷病発生件数（件）	115	72	187	13	13	26
R元年度傷病発生率(%)	0.57	0.20	0.77	0.04	0.06	0.09
H30年度傷病発生率(%)	0.63	0.39	1.02	0.07	0.07	0.14
25年間の平均傷病発生率(%)	0.82	0.74	1.56	0.13	0.10	0.23

※発生率は処置件数を利用児童延人数で割り算出した。

(2) 傷病発生状況の内訳

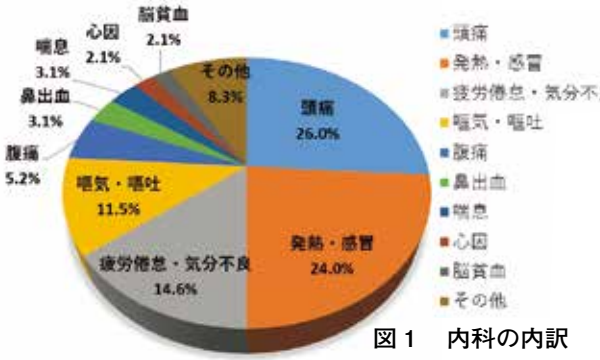

図１　内科の内訳

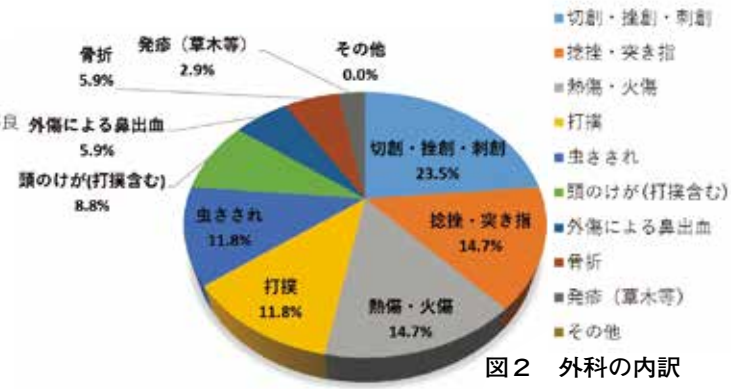

図２　外科の内訳

内科の内訳は、「頭痛」(26.0%)が最も多く、その次は、「発熱・感冒」(24.0%)になっています。外科の内訳は、「切創・挫創・刺創」(23.5%)が最も多く、次いで「捻挫・突き指」(14.7%)になっています。本年度は「虫ささされ」として、新たに**アオバアリガタハネカクシ(やけど虫)**※による被害が２件あり、いずれも医療機関での受診となりました。

※アオバアリガタハネカクシ

体長約7mm。細長く、頭部と腹部末端が黒く、その他は橙赤色。人間の皮膚に体液が付着すると、やけどのような症状を引き起こします。
（出典：日本臨床皮膚科医会ＨＰ）

(3) 活動別けがの発生件数・受診件数

活動別けがの発生件数では「隠れ家づくり」（６件）が最も多く、その次は「移動中」「登山」（各５件）、「野外炊事」（４件）となっています。

図３　活動別けがの発生件数

2　健康で安全な自然学校のために

今年度は外科による傷病件数、受診件数は昨年度に比べともに減少しており、利用校の事前及び実施期間中の安全指導が適切に実施された成果と考えられます。特に、図３に見られるように「野外炊事」と「自由時間」でのけがが大きく減少しており、全体のけがの発生件数の減少(72件→34件)につながっています。このことは、利用校が事前の安全点検、安全指導を適切に実施されただけでなく、ゆとりあるプログラムの中で、児童がじっくりと活動に取り組める時間が確保されたことにより、心身ともに「ゆとり」ができ、児童の安全に対する意識が高まったとも考えられます。

県教育委員会では、「ゆとりある時間の中で自然と豊かにふれあう活動」の充実を期待しております。これからも「ゆとりある」プログラムの実施をお願いいたします。

（森本　裕紀）

令和2年度　講座・研修会のご案内

自然学校出前講座

実施時期日　令和２年４月～令和３年３月（実施日は各学校の要請をもとに調整します）
内　　容　◎プログラムデザインに関すること
◎自然学校に関すること
自然学校の趣旨説明・事前学習・保護者説明会（原則、本校を初めて利用する学校のみとします）
※出前授業として、県立南但馬自然学校で展開されるアクティビティの一部も行うことができます。（ロープワーク実習、１人用テント設営、野外炊事実習、火おこし体験等）

自然学校指導者スキルアップ研修

期　　日　令和２年８月４日（火）
対　　象　県下の公立小学校教員（初任者研修及び中堅教諭等資質向上研修としても受講可）
募集定員　20人
内　　容　アクティビティ指導の基礎基本 実習「五感を使った自然にふれる体験活動～もみじがりと紙すき体験～」
プログラムデザインの基礎基本 演習「自然学校プログラムデザイン」

自然学校講座（指導者入門）

期　　日　令和２年８月３日（月）～８月５日（水）※１日又は講座単位の受講も可
対　　象　大学生、一般県民、県下の公立学校教員、その他自然学校に関心のある方
募集定員　30人
内　　容　自然学校・野外活動におけるリスクマネジメント、指導補助員の心得、兵庫型「体験教育」とは、自然のお話と自然散策、救急救命法、キャンプファイヤーの基礎基本、野外炊事指導の基礎基本
参 加 費　7,000円程度（宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費）

プレ自然学校・アフター自然学校

期　　日　日帰り又は１泊２日
(1)自然学校受入期間中　金曜日・土曜日受け入れ可（金曜日から土曜日にかけての１泊２日も可）
(2)自然学校受入期間以外　全日（日曜日～土曜日）受け入れ可（日曜日以外の休校日を除く）
対　　象　県下の公立小・中学校
内　　容　自然散策、朝来山登山、自然体感ゲーム、自然物クラフト、野外炊事、隠れ家づくり、星空観察、テント泊等
経　　費　食事代（弁当持参も可）、施設使用料、活動材料費が必要です。

親子で自然学校　～豊かな自然の中で親子のふれあいを深めましょう～

期　　日　第１回 令和２年４月25日（土）～26日（日）　第４回 令和３年２月６日（土）～７日（日）
第２回 令和２年８月22日（土）～23日（日）　第５回 令和３年３月13日（土）～14日（日）
第３回 令和２年12月12日（土）～13日（日）
対　　象　原則として県内の小学生とその保護者※原則１泊２日ですが、日帰り希望も受け付けます。
募集定員　10組（40人程度）
内　　容　遊び場づくり、竹食器づくり、昆虫標本づくり、自然物クラフト、キャンプファイヤー、火おこしと野外炊事、リースづくり、非常食づくり、ダッチオーブンを使ったアウトドアクッキング、星空観察、竹田城跡登山等
参 加 費　宿泊料、食事代、リネン料、保険料、活動材料費等が必要です。

遊友体験活動　～南但馬自然学校の自然を五感で感じよう～

期　　日　第１回 令和２年７月４日（土）「初夏の里山を楽しもう！～夏の生き物さがし～」
第２回 令和２年10月17日（土）「紅葉の里山を楽しもう！～さつまいも堀りと焼きいも、どんぐりみつけ～」
第３回 令和３年２月27日（土）「早春の里山で楽しもう！～蕎麦打ち体験～」
対　　象　県民の方（小学生以下は保護者同伴でご参加ください）
募集定員　第１回：30人程度、第２回：60人程度、第３回：20人程度
参 加 費　第１・２回：50円（保険料）　第３回：1,000円程度（食材費、保険料）

大人の自然教室

期　　日　第１回 令和２年５月９日（土）「絶滅危惧種、希少種の観察」
第２回 令和２年11月14日（土）「もみじの多様性を学ぶ」
第３回 令和２年12月５日（土）「つる植物で遊ぶ」
対　　象　自然体験活動に関心のある県民の方
募集定員　20人程度
参 加 費　50円（保険料）※内容によって食事代、活動材料費等が必要な場合があります。

※詳しくは、兵庫県立南但馬自然学校指導課までお問い合わせください。

南但馬自然学校だより「どんぐり」№75　●令和２年３月　●兵庫県立南但馬自然学校発行
●〒669-5134 兵庫県朝来市山東町迫間字原189　●TEL(079)676-4731　●FAX(079)676-4008
●URL http://www.shizengakko.jp/　●E-mail Mtajimashizen@pref.hyogo.lg.jp
01教Ⓟ2－034Ａ4